
残酷姫（更新停止中）

蓮希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残酷姫（更新停止中）

【Nコード】

N8709D

【作者名】

蓮希

【あらすじ】

残酷姫と呼ばれる者が居た。その者は、外見に似合わぬ血の付いた剣を振り回す、それはそれは綺麗な女だと、噂は言う。その国の名はルーウィスア。その国の有名な貴族であるレイスは、ある目的を胸に、首都へと向かう。そこで出会ったのは綺麗な外見を持つ女だった。

一話 旅立ち（前書き）

其処まで残酷描写有りと有りますが、そこまで酷く無いものだと思います。（多分ですが）

一話 旅立ち

戦場となった地に鳴り響く悲鳴。

それを気にせず、女は次々と人を斬り捨てた。

外見に似合わぬ片手剣を振り回し、瞳に移すは無。

生臭い匂いの中で

ただ、女は狂ったように人を殺す。

己の敵を

気付けば、一人。

返り血すら浴びていない無傷な女は、己の手を眺める。

「血で……染まつ……な」

眩き、疲れが溜まったのかゆつくりと女は前へと倒れる。

周りには無数の屍。

誰一人、生き残っていない。それは残酷な姿で倒れていた。

美しい外見に、血で染まつた片手剣。

人はそれを悪魔と呼ぶだろうか、外見だけならばきつと天使とも呼ぶだろう。

そんな女の二つ名は、残酷姫

「レイス！…シエレイスト！」

長い、長い廊下を歩く青年はただ、周りを見渡すだけだった。

自分の声が響いているにも関わらず、目的の人物は見つからない。片手に持っている書類を握り締めて誰も居ない廊下や、壁を睨む。

「何でアイツは居ないんだ……っ、」

片手に握り締めた書類を一度眺めて、青年はまた歩き出す。

この広い広い邸に、自分の求めている人物が居ないとするのはまだまだ先の話である。

「……………探してるし……しっこい奴だね、クライスも」

近くの木の上からは窓が良く見える。そこから自分を探す家人の姿を見つけ、微笑む。

クライシエリア「ロイシエレット。それが先ほどから自分を探している家人の名であり、シエレイストの友人でもある青年だった。

自分を探すのに頑張っている家人を眺めてから木から飛び降り、綺麗に着地すると空を見つめる。

真っ赤な血のような長い髪を靡かせ、シエレイストは足を進めようとした時だった。

「レイス……？」

自分の名を短く呼ぶ声に、振り返る。決して、自分を探していた家人の声ではない事を確認して。

振り返った先に居たのは、短い黒髪をかきあげて自分を見る少年。

その姿に、シエレイストは呆れた溜息を吐いた

呆れたような目で、少年　グレシエを見つめると、その片手に握られた書類へと視線を移す。

「何を持っているんだい？」

女とも、男ともそれそうな中性的な声で、それでも美しい響きを持つ声で相手に問うと、グレシエは小さく声を漏らしてから、書類を渡した。

その内容は、自分が予想していた物であり、深く溜息を吐く。

残酷姫　それが、書類の内容だった。

その内容に目を通すとグレシエに、書類を返し軽く伸びをしてから歩き出す。

慌てて、シエレイストを追いかけるグレシエ。

フウツと息を吐いて、シエレイストは振り向いた。

「グレイスト」シエリシア」

凜とした声が響く。それは、グレシエのフルネーム。

シエレイストにとって、人の名をフルネームで呼ぶときは、大抵人に命令や願いごとをする時である。

グレシエはピタリツと足を止め、シエレイストの声を待つ。

「グレイスト。私はこれから、首都に向かう。クライシエリアに追いかけないように行つといてくれ。……最も、追いかけるといったらどんな手を使ってでも良い、絶対に止めるように。……返事は」

「了解……レイス。一体どうするつもりなんだ？」

「……残酷姫……いや、なんでもないよ。行ってくる、グレシエ」
いつものように、いつもの名で呼ぶレイスにグレシエはほっとしながら微笑んだ。

「気をつける、よ？レイス」

「ああ。」

向かう地は首都　レジェイアント

それから数十分後、シエレイストの邸に大声が響く

「首都だ！？あんなところに一人で行ったと言うのか!？」

「だから、そう言ってるだろ？」

怒鳴るクライスに、呆れたように言うグレシエ。

この邸に仕えるメイドはビクビクとしながら、二人の真ん中にあるテーブルにへと紅茶を淹れる。

それを見てから、キュツと紅茶を飲み干す。

グレシエは溜息を吐くしかなかった。

「このレイコン」

「は？」

「シエレイストコンプレックス。略してレイコン」

その言葉に、メイドは吹き出す。それほどクライスはシエレイストにくつついて歩いていた。

だからこそ、こうして近くにシエレイストが居ない事で、不機嫌になる。

蒼い髪をかきあげながらクライスはグレシエを睨む。

「どうして着いて行かなかった？」

「着いて行ったらお前が追いかけてくるからだろ？だから、レイスも一人で行った。つまり、一人でしたい事がある。そういうことだ。」

「一人で勝手に納得するな！！俺は行くぞ！レイスの……とこ、ろ……に……」

グレシエの言葉に怒り、立ち上がったクライスは、よろける。

そろそろか……と、グレシエは、息を吐く。

頭を抑えながら言うクライスに、バーカと言葉を放った。

「そういうと思ったから、睡眠薬を混ぜといたよ。」

「なっ……くっ……」

「首都に行く道なんてたくさんある。レイスを追いかけるのなんてもう無理だろうな」

そう言つて、自分も紅茶を飲んだ。もちろん、これに睡眠薬は混ぜていない。

紅茶を飲み干すと、グレシエも立ち上がる。

今のクライスはやっと意識を保っているような状態で、レイスを追いかけるのも難しいだろう。

その様子を見て、グレシエは目を伏せる。

自分だつて行きたかった。レイスと共に

それだけ、あの人を慕っていたのだ。それでも……

「お前がレイスにくつついているように、俺にとっても、レイスの命令は絶対だ」

クライスが最後に聞いた言葉は、悲しげなグレシェの言葉だった。フウツ……と息を吐く。

倒れたクライスを運ぼうと担ぎ上げた。

「早く、帰って来いよ。レイス」

自分はただ、大切な友人を此处で待つしかできないのだ。

深い森の中

片手剣を杖にただ、ただ、歩いていく。

崩れ落ちそうになりながらも頑張つて、歩く。

トサリッ…

女が、気付いた時には音を立てて倒れていた。自分の、母の形見である片手剣を握り締めて

「……………いよ……………たい……………」

かすれた声の呟きは、風に紛れて消えた。

そして、ゆつくりとした動きで、瞳は閉じられる。

女の意識は深い、深い闇へと落ちて行った。

二話 始まりの出会い（前書き）

短いです…

二話 始まりの出会い

グレシエと離れ、レイスは街を歩き始めた。

目的の場所は道具屋、勿論、道具を集めるためだ。

扉を開ければ中に居る、店主。自分の姿を見つけると驚いた様に声を上げた。

「シエレイスト様！」

まさか自分のような者が来るとは思ってたのか驚き口をパクパクと開け閉めさせながら近づいてくる。

「今日は、何の御用で？」

「外出用の回復アイテム、ナイフ、食料を素早く用意して欲しい。」
その言葉にポカーンとする店主。

その様子を見て、シエレイストはふうと息を漏らした。

「これから長期の旅に出るので、早く頼みたいのだけどねえ……」

その言葉に店主は用意を始めた。

その間、ぼんやりと空を眺めていると道具屋の扉が開いた。

視線を向ければ其処には見知った顔。この国の貴族である、ユーリイだった。

「シエレイスト、グレシエから聞きましたよ？貴方、長期の旅に出るのですってね？」

「…あ、……ああ。」

その言葉にユーリイは怒鳴った。

「何が『…あ、……ああ。』ですの！？貴方はこの国を代表する貴族ですよ？国王でさえも貴方を信頼していらつしやるのに、それが行き成り長期の旅ですって！？冗談じゃありませんわ！！国王に見捨てられたら貴方はどうするのですか！？」

「いや、ユーリイ。私が行くのは首都だよ。つまり、王のところだよ。勿論、謁見の許可も貰っているから、……大丈夫、私はすぐに帰ってくるよ。」

自分の親友であるユーリイは、純粹に自分を心配してくれているのだ。

彼女にとって、自分はただの貴族に過ぎない。だからこそ一人旅なんて馬鹿な真似は止せと言っているのだ。

自分が剣や、魔法が使えることを彼女は知らないから……か。

そつと彼女の肩に手を置き微笑めば、はいと小さく返事をして去って行った。

小さく、御免と謝る。

そして、用意された道具を手にとればシェレイストは旅に出た。

「……たよ……」

森の中、泣きそうな声が、聞こえた。

かすれた声を耳にすれば、シェレイストはキョロキョロと見渡しなから辺りを歩く。

今、確かに声が聞こえた。

これが誰の声だかは分からない。

剣を抜いて少し警戒しながら歩けば、死にかけているように見える女を視界に捕らえた。

慌ててシェレイストは腰にかかっていた水を手に取り、女の口元へと持っていく。

「飲めるかい？」

静かな森で、静かに問えば、女はそつと上を向いた。

美しい、と思った。

整った顔立ちを見て、思わず手に持っていた水を落とすかと思った。動けないのか、手が震えていて、此方へと向かってくる様子は無い。迷わず、水を女の口元へと運ぶ。

水が、女の口からこぼれる。

それでも、少しずつ、女は飲み込んだ。

そして、数分後、今度はお腹がすいたという女に、シェレイストは苦笑するのだった。

三話 食料が…（前書き）

前回からだいぶ時間が経ってスミマセン…；；

三話 食料が…

持っていた袋から食料として持っていたパンを取り出せば、そっと女に渡した。

そのパンを迷わず口に運ぶ女を見て、レイスは苦笑した。

「まだあるよ？食べるかい？」

そういった私にコクリツと頷いた女は、用意していた食料を全て塵も残さず食べきった。

……ああ、気前良くしたのは良いものの、昼食どうすれば良いのだろう。

内心そんな事を思いながら、女に微笑む。

「私はシエレイスト。レイスで良いよ、君は？」

そういいながら、右手を差し出す。

女は戸惑ったように、かすれた声で呟いた

「……………ミユレイル。ミユレイル〃ウェイラ……………」

そついつて、戸惑ったように私の右手を取った。

「食料と、……………水を、有難う御座います。……………レイス」

頭を下げて、微笑むミユレイルに小さく声を漏らす。

綺麗だと、思った。

整った顔立ちに蒼い髪、短いとも、長いとも取れない長さ。

深紅の髪が風で揺れるのを肌で感じながら

そつと、ミユレイルの手を取り、口付けた。

「綺麗な方だ。」

呟き、相手の方を見ると、パクパクと口を開け閉めしていて、顔が真っ赤だった。

雰囲気や、仕草の一つ一つを見て、てつきり貴族だと思っていたのだが違っていたようだ。

貴族というものはこういうものをされ慣れているとユーリィは言っていた気がするのだが…

「あ、えつと……どうも。です……所でっ、あの……レイスは……」
顔をまだ赤くしたまま戸惑ったように言う彼女に首を傾げる。

「どうしたんだい？」

「…………、れ、レイスは女性ですか！？それとも、男性ですか！？」
その言葉に呆然とし……ふつふつと笑いがこみ上げてきた。

「はははははは、いや、ちょはははは」

真剣に聞いてきたミュレイルには悪かったなと片手で口を押さえる。
ものの笑いは止まる気配が無い。

ミュレイルはうーと小さく唸った。それは可愛い小動物のように。

「……真剣……だったのに」

「いや、悪かったよ。うん。皆疑問に思うようだけどそんな真剣な顔して聞く人あんま見ないもんで……で、……どっちに見える？」

「えつと……女性……？」

その言葉にフツツと微笑み、口元に人差し指を立てた。

「秘密」

その言葉にミュレイルは思いっきりショックを受けたようだ。

まあ此処まで笑われてしかもその問いの答えは秘密ときたら怒るのも普通だろう。

そんなほわんとした雰囲気は、一瞬で崩れた。

「……魔物……？」

二人して言葉を合わせると同時に、空から魔物十数体が殺気を纏いながらやってきた。

ハアツと息を吐く。また結構な量だな。

見たところミュレイルも剣が使えるようだが……

「ミュレイル、後衛はいけるか？」

問うと肯定の言葉が返ってくる。

なら、自分は前衛か。

考えると同時に剣を抜き、手近なところに攻撃を仕掛ける。

「母より護られし風の刃！ウインドレイン……！」

声が聞こえたと同時にバックステップを取った。

ミュレイルの放った術は自分が避けると同時に、目の前の敵を風が切り裂く。

「ミュレイル、中々やるね」

「レイスも！」

パチンツとお互いに片手を叩き合った

取り合えず私とミュレイルはずっと此処に居るわけにも行かないので歩き始めた。

首都の道を外れるが、後二時間ほど歩いたところに街が有る。

それを、ミュレイルと共に見つけることになった。

「レイスは、どうして首都に行くの？」

軽く首を傾げて聞くミュレイル。

……この外見で道を歩いたら男女構わず三回は振り返るんだろうね。

「……ちよつとね。君も残酷姫ぐらい知ってるだろう？」

何気なく聞いた言葉にミュレイルの身体は軽く震えた。

ふと、首を傾げる。

「何か知ってるのかい？」

「……うん！」

「？まあ良いけど……」

残酷姫……

この国ルーイスアを騒がしている殺人鬼。それが、残酷姫。

殺人鬼というけれども、殺された奴には必ず共通点がある。

人々は残酷姫を恐れるが決して”ただ”の一般人には手を出さない。罪人を裁く……という方でも取れるが決して罪人だけというわけでもない。

全て、10年前に起こった戦争に関わった人が殺されている。

10年前に戦争がこのルーウィスアと隣にある国、ラスベルグで起こり、その戦争で多くの被害があったのは国境の街 レイシエル。大きな面積を持つその街の生存者はたった数人だったりする。

そのことから残酷姫はその街の出身者だと考えられてる…らしい。

「それで、残酷姫が…どうしたの？」

「まあ、残酷姫に関する話ということでこのことは置いといてくれるかい？」

「……良いけど」

「有難う」

そつと微笑むとミュレイルは言葉につまったように他所を向いてしまった。

レイスはその顔が赤く染まっていたことに、気づかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8709d/>

残酷姫（更新停止中）

2010年10月10日00時04分発行